

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第61号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

地域を見る眼力 — 朝宮茶と宮座から —

野間晴雄

Contents

Pages 1.....

巻頭言

地域を見る眼力
—朝宮茶と宮座から—
野間晴雄

Page 2.....

卒業生だより

地理と友に
宮林由佳

学窓から

目線と視線
東出修一

Page 3.....

卒業生・修了者名簿と
提出論文題目

卒業生の活躍

Page 4-5.....

研究ノート

The Hue Citadel and
its Fate in the Rise and
Fall of the Nguyen
Dynasty (1802-1945)
NGUYEN Thi Ha Thanh

Page 6.....

バス1日巡検報告

信楽・宇治・南山城
植田恵里香

今後の研究会行事

Page 7-8.....

教室だより

Page 9.....

『千里地理成長記2』
の刊行

Page 10.....

随想

誰もが楽しくできる
地理教育を
桑原康宏

新入会員より

Page 2-3,6-7

新院生紹介

Page 7-8

歳を重ねるにしたがい、地域を見る眼も熟達した境地に立ちたいと思うようになってきた。力に任せたがむしゃらな調査と膨大な資料解析をひとりの力でやるには、今はまとまった時間がとれない。金太郎飴のごとく同じテーマで地域を変えこつこつと事例研究を重ね着実に一書にしていくのは、引き出しが多すぎる私の性分にはあわない。

地域の比較は何が共通し、何が異なるかを見出すこと——ただその2点に集中する。つまり、比較すべき要素は最低どちらかの地域に出てくるものである。両地域に出てくればそれは「共通」し、一地域にしか見られないならば「異なる」とする。

列挙とその計量は大容量コンピュータが最も得意とする分野である。科学技術の発達が不可能を可能にした典型であろう。ただ、人はその量に圧倒されながらも、感動するのはデータベースの中に単純な法則や傾向が見出された時に限られる。ただしこの疲れ知らずの利器にもできないことは、何がそこに欠けているかという指摘ではないだろうか。母集団の解析や、複数母集団の違いは測れるし、データベースのキーワード検索で思わぬ関連も発見できる。しかしある母集団にないものを指摘し、なぜ「ない」のかを論証することは、コンピュータがはなはだ苦手とする領域である。ここでは人間としての経験・知恵が駆使され、直観が必要となってくる領分である。

10月11日秋晴れの日曜日、久しぶりに「滋賀の食事文化研究会」という集まりに参加した。この会は滋賀大学で同僚であった食物学の堀越昌子教授が中心となって、行政や県下の栄養士、食に関心を持つ人々による純然たる民間の研究会であるが、食育など地道な社会活動にも力を注いでいる。創立以来の会員ではあるが、最近

は忙しさにかまけてすっかりご無沙汰していた。今、ネパールからの留学生に博士論文のテーマを与えながら、私自身もこれから踏み込んでいきたいのが「茶の文化交渉学」である。食文化としての茶には古今東西の膨大な文献がある。茶は亜熱帯中国の内陸山間部に起源を發し、薬用から人間との関わりが始まるが、緑茶、紅茶、ウーロン茶などに分化して日常飲用化して世界を席卷する。非アルコール飲料ながら、喫茶、

茶館、アフタヌーンティーはコミュニケーションを演出する。日本では茶道が上流階級で発達し高度の精神世界を創り出した。茶園経営と茶の流通・貿易はたいへん複雑で、1つのモノの経済史としてもグローバルである。日本では幕末の開国以降に生糸とならぶ輸出品の太宗として外貨獲得に貢献した。

茶農家は葉の収穫後にただちに荒茶製造までの農産加工を行わねばならない。茶は不便な内陸農山村での貴重な現金収入源であった。これほどまでに普及・珍重された茶だが、日本では禅宗や僧侶にまつわる中国からの茶の招来伝承はあっても、木を愛しみ、成長過程での細やかな儀礼を行い、茶の収穫を祝うことはない。もっぱら関係者は茶の製法・流通に終始する。茶壺道中のような献上儀礼はみられたが、稲や麦、トウモロコシやイモがもつ農耕儀礼が茶に関してはほとんどない。当然のことかもしれないこの事実を、私は今回、古くからの茶産地である朝宮の宮座行事を見てはたと閃いた。

滋賀県甲賀市(旧信楽町)朝宮は信楽川が上流の谷あいを出たところに位置する山間集落で、元和元年(1615)にすでに上朝宮と下朝宮に分かれている。両集落の氏神は上朝宮の山裾にある三所神社である。境内の両側では、今座、大座、幣座(以上本殿に向かって右側)、親座、孫座、姫座、出ヶ座(左側)の7座に属する人々(座衆)が、棧敷のような4棟の木造茅葺の建物に入って共食する。青大豆(枝豆)をすりつぶした餡にゆでた牛蒡をいれた「くるみごんぼ」と甘酒で饗宴する。拝殿にはモツソと呼ばれる味噌、枝豆の餡、飯を円錐状に盛った神饌を用意する。個人の供え物として、栗、里芋、昆布、大根、白菜、リンゴ、鏡餅などが並べられるが、茶はなかった。もとは両集落の特定の家筋だけの特権的な座であったが、下朝宮の座(姫座、出ヶ座)が抜けて、上朝宮だけで全戸加入の平等な座になっている。神前では巫女神楽、神相撲などが奉納される。ただし御輿だけは両集落の住民が担ぐ。稲作の収穫感謝と翌年への予祝要素がきわめて強い。

茶のような木本永年作物には一年生植物のような季節感がないし、イモのような栄養体繁殖にみられる多産のイメージもない。伝統的な茶は日本では山間地での副業としての商品作物で、米よりも導入が遅い。茶が貴重な薬用植物として当初は栽培化が始まったにせよ、栽培化の歴史は相当に長い。それなのに地域共同体への関与が希薄なのはどうしてだろうか。日本を越えた地域比較からこの謎に迫ってみたい。

(本学教授)

新入会員より

天本泰晶

兵庫県出身で下宿しています。教職を取るために、あまり地理関連の授業とれてませんが、よろしくをお願いします。

石田夏樹

はじめまして石田です。出身は神戸市で近所には、五色塚古墳があります。神戸へ遊びに来るときには連絡ください。ご案内いたします。宜しくお願いします。

井上麻衣

地理学で楽しい3年間を送りたいと思います。あと、方向音痴がなければ嬉しいです。

岩上友紀

高校の時から地理が好きです。大学の地理は高校までのものとは違いますが、がんばります。

大成美沙

けっこう人見知りしてしまう性格ですが、いろんな人と仲良くなりたいのでよろしくをお願いします。

北窪友美子

関西大学は地理学を学ぶのにいい環境であると聞いて文学部を受験しました。まだまだ分からないことばかりですが、よろしくをお願いします。

北脇一馬

右も左もわからない状態で至らないことがまだまだ沢山ありますが、頑張って地理学の色々なことを学びたいと思います。

橘谷晴菜

橘谷晴菜です。なぜ地理学を専修したかという点、環境問題に興味あり、木庭先生が研究していることにも興味があったからです。

旅行も好きでいろんなところにフィールドワークに行けるのが楽しみです。犬ではバグが大好きです。

学窓から

目線と視線

東出 修一

いつの頃からであろうか、今となってははっきりしない。気がついてみると「巡検」という文字やことばが目や耳に入ると、体が自然に反応して気持ちが高揚するようになっていた。今に至るまで、国内・海外合わせて数多くの巡検に参加する機会に恵まれ、おかげで地理学徒ではなかったが、巡検を通して多くのことを学ぶことができた。

巡検等で同じ場所を訪れると、目線が変わるので視野が広くなり、以前に訪れたとき、気がつかなかった、新たなものを見出すことがある。事前の準備不足といえはそれまでだが、事前準備には限界ある。巡検においては、巡検地での滞在時間を十分にとっておくことが大切なことである。

団体で巡検していると、現地の人から見られていることはわかるが、個人で気楽に歩いて、周囲の様子を何気なくみていると、家の中から

の目線とぶつかるかこともあり、地元の人から声がかかることある。巡検中の行動は見られていると認識しておくべきである。そして、目線を広げて視野を広げよといっても、挙動不審者に間違えられるような行動は慎むべきである。

地理を志す者にとって、巡検は重要な要素であることは今更申し上げるまでもない。巡検においては、自分の目線の先から反対に視線が発せられていることに注意し、その視線が冷たい視線となることのないように巡検活動をしなければならない。

最後に、巡検と違うが、目線を少し変えてにえやると、当然視野も広がり、見える範囲も広くなり、同時に相手からの視線も多くなるとすれば、就活に当てはめればどうなるか。ポイントはいかにして相手からの視線を増やすかであろう。現役諸君の祈願成就を祈念する。

(本学博士課程前期課程)

卒業生だより

地理と友に

宮林 由佳

私の大学生生活を振り返ってみると、まさに地理づくしの4年間だったと思います。とはいっても、こんなことを言ったら怒られるかもしれませんが、4年間勉学に勤しんだという意味ではありません。「地理学専修」というクラスをとにかく楽しく過ごした大学時代でした。今は無きA棟製図室に自然とみんなが集まり、地理のことや地理とは全く関係の無いことを時間のある限りしゃべっていました。地理専修とは別の友人に、同期のゼミ生や学部生と連絡を取り合ったりしているのかと聞いてみると、ほとんどの人が連絡を取り合わないと言っています。それが普通だとしたら、地理学教室は特別なところですよ。卒業した今も同期生でよく集まっています。

私の個人的な考えですが、地理を選ぶ人はなかなか個性的な人が多いと思っています。そんな人たちが集まると全くまとまらなさそうですが、実はこれがお互いの個性を認め合って強い絆を生むのです。お互いを良く知るために、我々にとって地理学演習や実習は本当に良い機会でした。

地理学の良いところは、机上の勉強だけではなく、フィールドワークで学んでいくことです。地理学を専修して初めての講義で、伊東先生はこうおっしゃっていました。「君達は地理を選んで正解。同じ釜の飯を食べた者は絶対に仲良くなります。」本当にそうでした。実習先の三重県松阪市で同じ釜の飯を食べた私達は、地理を通して一生の友人となれたと思います。その実習で、松阪駅前の朝市に行き、カニを買って、その夜鍋にしてみんなで食べたのをよく覚えています。

今年3月、橋本先生の最終講義に出席しました。出席できない人もいましたが、先生のお人柄があり、たくさんの方が集まりました。こうやって、卒業した今もみんなと繋がってられるのは幸せなことだと思います。社会人となった今、地理学と一緒に学んだ仲間と会うことは、ほっと一息つける瞬間です。

人との出会いは人生の宝。地理を選んで正解でした。

(2004年卒業：ノーブルトレーダース株式会社)

卒業論文・修士論文・博士論文一覧 (2009年3月卒業・修了生)

<卒業論文>

- 上田 直樹 歴史的景観を活かしたまちづくりと観光振興 —岸和田本町地区を例として—
 風野 宗平 大阪市生野区「コリアタウン」の変容
 齋藤 鮎子 「富士宮やきそば」による町おこしと観光化
 —すきま商いが表舞台にできることの光と影—
 澤部 竜志 オオサカガーデンシティの形成 —貨物駅跡地から高層ビル群に至るまで—
 杉本 隆 住宅から見る現代における沖縄の景観
 —沖縄県那覇市首里地区を事例として—
 高附 篤志 架橋がもたらす島の変化 —紀伊大島を事例として—
 土岐 里美 地域の存在とイメージ —メンタルマップ研究のこれまでとこれから—
 藤森久美子 小京都の歴史的町並み保存と観光活動
 上野 修平 総合型地域スポーツクラブを通しての街づくり
 —神戸市のスポーツによる地域振興—
 久米 康絵 バンクーバーにおける移民と居住構造 —エスニックコミュニティの形成—
 倉嶋ひとみ 静岡市の中心商業地域における商店の変遷とその特性
 —城下町時代から現在まで—
 船瀬 奈月 長崎くんちの現状と課題 —地元住民の視点から—
 山田小紅美 医師の地域的偏在と適正配分に向けて —大阪府を事例に—
 山本 健一 滋賀県日野町(谷)の灌漑水利の変遷 —水利の安定を求めて—
 水落 仁美 紀ノ川流域における農産加工と直売店の関わり

<修士論文>

- 池田 大志 外国人観光客及び移住者増加に伴うスキー場周辺地域の変容
 —長野県白馬村・北海道ニセコエリアの比較—
 舟越 寿尚 大阪市における賃貸住宅の地域的特性
 松村 弘 大阪市の都市観光の現状と今後の課題
 的場 貴之 東北タイ農村における水利用意識の変化 —生活様式の都市化を背景として—
 丸橋由起子 訪日観光の実態分析と課題 —日常空間の視点から—
 徳田 匡秀 歴史的街並みの保存と暮らし —山口県柳井市古市金屋地区を例に—

<課程博士論文>

- 松原 光也 現代日本の地方中心都市における公共交通の再生とまちづくりに関する地理学研究
 岡田 良平 ラオ文化圏における農村社会の学校施設と進路選択の変容に関する教育地理学的研究
 —東北タイ・ピエンチャン平野農村の比較—

<論文博士論文>

- 矢嶋 巖 生活用水・排水システムの空間的展開

卒業生の活躍

教室の卒業生であるお二人の方が新刊書を刊行されました。

●三木理史『局地鉄道』塙選書、2009年6月刊、全217頁

日本の鉄道史上に小規模経営のローカル線である局地鉄道の誕生から、地方での鉄道熱、軽便鉄道、戦時体制での変化、戦後の廃止、第三セクター鉄道、近年の観光鉄道まで、外地(台湾、朝鮮、樺太、満州など)を含めて記した概説書である。三木先生(1988年卒業、91年D中退)には本学で学部・大学院で歴史地理学の非常勤講師として出講していただいている。奈良大学文学部准教授。

●平岡昭利編『離島に吹くあたらしい風』海青社、2009年9月刊、全112頁

日本の離島に関する地理学の論文を集成した

『離島研究Ⅰ』、2003、『離島研究Ⅱ』、2005、『離島研究Ⅲ』、2007、いずれも海青社刊、に続いて、日本地理学会離島地域研究グループの成果を発表した熊本大学での2007年秋の公開シンポジウム「離島に吹く新しい風を捉える」を一般向けに提示した書物。対馬の韓国人旅行者、五島列島のキリシタンツーリズム、新潟県粟島のグリーンツーリズム、香岐のブルーツーリズム、西表島のエコツーリズム、エミュー牧場を導入した山口県蓋井島、Iターン者が急増する石垣島の事例がとりあげられている。関大地理学教室OBとして編者(1973年卒業、78年D修了、下関市立大学経済学部教授：蓋井島)のほか、石川雄一氏(1981年卒業、87年D修了、長崎県立大学経済学部教授：石垣島)が寄稿している。

鯉沼貢大

一般教養や学びの扉などで気付いたら地理系の科目をたくさん取っていたので地理コースを選びました。今後は地理に関する知識を深めていき、また現地へ実際に調査することで地理のことをもっと好きになっていきたいと思っています。

小西雅人

こんにちは。僕は実際に外へ出かけて調査をするという他の専修にはないところに地理学の魅力を感じました。一期一会を大切にしていきたいです。

佐々木幸枝

二回です。出身は京都の桂です。趣味は目的のない旅行と、単車です。趣味は定期的に変ります。よろしくお願ひします。

田辺麻希

山口出身なので山口のことで何か気になることがあったら何でも聞いてください!

中辻真央

サークルは軽音に入っています。

西川沙世

よろしくお願ひします。

橋本敬吾

はじめまして。地理学コース専攻の橋本敬吾です。1回生のときから地理学を学びたいと思っていたので、これからの大学生活が楽しみです。

春名由良

これから楽しんで地理を学びたい。旅行が好きなので、いろんな土地に行きたい。

古市良太

今年から沢山の地理。小学校の頃好きだった社会科。毎日、社会科だと思つたやばり大学はすごいです。

The Hue Citadel and its Fate in the Rise and Fall of the Nguyen Dynasty (1802-1945)

NGUYEN Thi Ha Thanh, Kansai University

1. Introduction

In 1802, the first emperor of the last imperial dynasty of Vietnam, Gia Long (1802-1820), was enthroned, starting the imperial fortunes of the second Nguyen line (1802-1945). The political transition concomitantly threw Hue city - the most valued item they inherited from their ancestors - into great upheaval. Under their rule, the face of Hue shifted rapidly with the emergence of the gorgeous Hue Citadel, exquisite handicrafts, and prosperous market places.

Unlike Hanoi and Ho Chi Minh, cities located on the two biggest wealthy rice granaries in the north and south, Hue, in central Vietnam, is composed of rugged mountains, narrow plains, and numerous lagoons. Hue's special landform actually made it impossible to build a centralized or fan-shaped urban model. If based on the current administrative boundary, it is estimated that a half of the 85 palaces of royal members are located outside Hue City.¹ Hence, Hue City in the 19th century would be better described as following its geographic demarcation - the Huong River - rather than any defined administrative boundary. Hue Citadel was not only considered as the centre of Hue City, but also of the whole region along the Huong River, from Thuan An sea-gate back to the confluence where it begins. This citadel was built on a riverside from the early heyday of the Nguyen Dynasty and then attracted to it commercial and residential quarters, and even the concession areas of the French in the dawn of the Nguyen reign.

2. Hue Citadel - The most significant figure of Hue City

Among several historic-cultural structures in Hue City constructed by the Nguyen rulers, Hue Citadel appears as the greatest one. Based on the design by the first king of the Nguyen Dynasty, Hue Citadel was ordered built in

1803. At that time, to clear the ground for the construction of Hue Citadel, residents of eight villages were requested to move to other places in exchange for free or decreased taxes (*thuế thân* and *thuế đao dịch*). Official immigration occurred continuously for the next 20 years. Replacing ordinary inhabitants were soldiers from many regions of the country, gathering in Hue with the respective tasks of building the citadel, serving the imperial family, or joining the royal troops.

This work was regarded as the symbol of power of the Nguyen Dynasty, as the Nguyen rulers themselves stated: "the structure in the middle of Vietnam, the high roof in the four directions, the Great Bear surrounded by the other stars."² This great citadel is actually an excellent combination of French architecture (in the Vauban architectural style), Vietnamese labor, and Asian culture, based on belief in *feng-shui*. Although detailed information is rarely found in historical materials, several historians still believe that the Nguyen Dynasty practiced the principles of *feng-shui* in the construction of Hue Citadel. Emperor Minh Mang (1820-1840), who himself admitted to not trusting in *feng-shui*, said that it was necessary to adopt principles of *feng-shui* for construction of the citadel for security.³ Hue Citadel, facing southeast, is located in a harmonious landscape according to *feng-shui* principles, which combines the powers of the red vermillion bird in front, blue dragon on the left, and the white tiger on the right. Applying these concepts to the natural landscape, Ngu Binh Mountain in front of the citadel was regarded as the red vermillion bird, or in other words, the screen that protected the entire citadel. Da Vien dune on the left side and Hen dune on the right side were considered to play respectively the roles of the blue dragon and white tiger as guards. These gods were expected to protect the citadel. Additionally, the Huong River flows in front of the citadel, along the east to the back, its function being the creation and maintenance of good "air" to enable the citadel to make its owners stronger and wealthier. In

terms of territory, the forbidden purple palace was built farther to the south of the citadel, on high land.

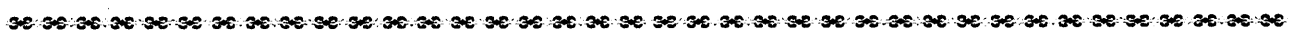
3. Hue Citadel and the fall of the Nguyen Dynasty

Hue Citadel underwent great upheaval when the Nguyen rulers lost their power to the French. In 1884, when the Nguyen Dynasty could not save Hue City from becoming a protectorate of the French, they reluctantly allowed the French to construct a modern concession area on the opposite side of the old citadel, including the French Residence Superior of Annam (*Résidence Supérieure de l'Annam*), Department of Gendarmes, several villas, shops, restaurants, and small workshops.⁴ Moreover, Mang Ca military base was set up right inside the citadel in 1884, and was expanded in 1886 to become the so-called Tran Binh concession area. A modern zone with new road networks named after deceased French soldiers, as well as military bases, banks, restaurants, libraries, and food store houses in the concession area made it different from the old citadel. In 1887, the political power of Hue City was transferred to Saigon, which was appointed the capital not only of Vietnam but of all of French Indochina by the colonizing French. From 1916, other ordinary people were allowed to occupy the empty spaces inside the citadel, while the old inhabitants - mostly mandarins, soldiers, talented handicraftsmen, and their families - immigrated to southern Vietnam, or abroad. During the next period, the influx invaded either the citadel or other royal relics (mausoleums of the

Nguyen emperors, national shrines, etc.) particularly from 1945, when the Nguyen Dynasty collapsed. More ordinary inhabitants from other places migrated to the citadel, invading areas along the surface of the citadel's wall, or any abandoned land. Significantly, most of them were manual laborers from rural villages inside and out of Thua Thien Hue Province. Since this time, the social structure has become more complex, and environmental pollution and the unattractive landscape of the citadel have become increasingly severe problems.

4. Conclusion

In short, the transition in function of Hue Citadel represents clearly the rise and fall of the Nguyen Dynasty. In the heyday of the feudal court, Hue Citadel symbolized the power of the Nguyen Dynasty not only because of its admirable architecture but also because of the significance of its adoption of *feng-shui*. It was considered an area restricted to residence by the emperor, royal members, high-ranking officials, soldiers, and talented handicraftsmen. The majestic Hue Citadel was rudely transgressed by the invasion of the colonizing French, and then by the ordinary people after 1884, though it was not until 1945 that the Nguyen Dynasty collapsed. The spurious nature of the last Nguyen reigns led to the disordered usage of Hue Citadel, a problem that was hard to solve even after 1993, when Hue City achieved the status of UNESCO World Heritage cultural site for its set of relics.



¹ Bùi Thị Tân. “Tiểu thủ công nghiệp ở Thừa Thiên Huế và những vấn đề đô thị hóa” (Handicraft guilds in Thua Thien Hue and issues of urbanization). *Huế Xưa và Nay Journal*, pp.763-764.

² Quốc sử quán triều Nguyễn (The historical association of the Nguyen dynasty) (translation by Phạm Trọng Điềm). *Đại Nam nhất thống chí (Geography of the united Dai Nam)*, Reprint, Volume I. Thuận Hóa Publishing House, Huế, 1992. p.16.

³ Quốc sử quán triều Nguyễn (The historical association of the Nguyen dynasty) (translation by the History Institute). *Đại Nam thực lục (Chronicles of the Nguyen dynasty)*, Reprint, Volume 3. Giáo dục Publications, Hà Nội, 2006, p.461.

⁴ See Nguyễn Thị Đám, Huỳnh Kim Thành. “Sự biến đổi diện mạo đô thị Huế cuối thế kỷ 19, đầu thế kỷ 20” (Perspective changes of Hue City at the end of the 19th century and the beginning of the 20th century). *Southeast Asia Studies Journal*, Volume 05, 2006, pp.42-50.

初めまして。私が地理学を選んだのは大学受験のために地理学を勉強して、その時に興味を持ったからです。無遅刻・無欠席を目指します。

宮本郁子

地理学は苦手ですが楽しんで充実した年月を送りたいと思います。そして立派な大人になりたい。

森 真澄

高校で地理を履修してなかったのですが知識は乏しいですが、諸分野と関連の深い地理学を楽しみながら接していく中で、多くのことを吸収していきたいと思っています。

森島宏美

広島県出身・広島育ちです。昨年大阪にやってきて、やっと慣れて来たところです。高校のときから地理に興味があり、今年地理学・地域環境学専修に進みました。これからよろしくお願ひします。

山田翔太

近畿地方からほとんど出たことがなく、周りの地理の事については知らないことが多すぎて知識が狭いので、幅広いことを学んでみたい。

山野千沙希

この地理学専修でいろんなことを学び、またいろんな方と仲良くなれたら嬉しいですね。よろしくお願ひします。

山本奈緒

高校では地理を学んだことがなく、分からないことがたくさんあるけれども頑張ります。沖縄と歴史も好きなのでいっぱい学べたらいいな、と思っています。よろしくお願ひします！みなさん仲良くしてください。

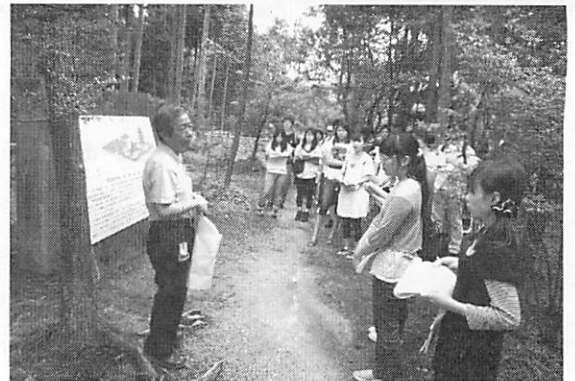
2009年7月19日(日)、信楽と宇治・城陽を中心とした南山城・信楽の自然、産業、歴史地理というテーマにしたがってフィールドワークをおこなった。今回は、大学院生の方々と私たち3回生が共同で資料作成にあたり、現地で発表をした。

まず、新大阪駅に集合、ここからバスに乗り名神高速道、京滋バイパス、新名神高速道を経由し、信楽インターチェンジで降りて信楽に到着した。町の至る所に有名な信楽焼きのためきの置物が並べられており、信楽を感じる事ができた。まず紫香楽宮・宮町遺跡を見学する。紫香楽宮といえば大きくて迫力のあるイメージを持っていたが、実際に見てみると宮自体は小さく驚いた。今では、この場所はひっそりとしていて当時の活気は感じられないが、昔はここが都として栄えていたことを思うと不思議な感覚になった。つづいて、滋賀県立陶芸の森を訪れ、この周辺で昼食をとった。陶芸の森の場所は海拔が350mもあり、市街地とは60mの高低差がある。この日はあまり天候が良くなかったが、町を見渡す事ができた、空気も大阪に比べると涼んでいて気持ち良かった。

昼食後に滋賀県立「陶芸の森」を見学した。ここには、たくさんの種類の陶器があり、高価なものばかりが展示されていた。ここを出て、信楽焼清右衛門窯・古信楽資料館を訪れた。実際に信楽焼を製造している方のお話を伺い、窯を見せていただいた。窯の中は階段状になっていて、上からみるとためきの形になっていた。信楽を出て、朝宮に茶園を下車して見学し、宇

治田原町、宇治白川から京都サンガのサッカー練習場である「サンガタウン城陽」となっている山砂利採取場を見学、木津川にかかる木津流れ橋(上津屋橋)と河川敷の被覆茶園を見学した。最後は木津川の旧河道と北川顔の堤防上集落、砂地での野菜栽培などを見学した。ここは久御山町内に八幡市の飛地が点在する。淀で一次解散して、JR大阪駅へ向かった。

事前に調べていったことを現地で実際に見て、五感を使って学ぶことができた。自分のイメージしていたことが違ったときの驚きや発見ができるのがフィールドワークの醍醐味だと思う。今回、案内やご指導をしてくださった野間先生、高橋先生、伊東先生、大学院生の方々ありがとうございました。次は10月におこなう奄美巡検に向けて皆で協力し合い、納得のいく実習報告を作り上げて、卒業論文につなげていきたいと思っています。(本学3回生)



信楽宮跡にて

今後の研究会行事

関西大学地理学研究会事務局

1. 日帰り巡検のご案内

恒例行事である秋の日帰り巡検を下記の要領にて実施いたします。多くの卒業生、院生、現役学生の参加をお待ちしております。

テーマ：寺内町「堅田」と門前町「坂本」の歴史

日時：2009年10月25日(日) 10時10分～16時00分頃(予定)

集合：JR湖西線堅田駅 改札口前

コース：JR堅田駅一本堅田4丁目—今堅田1丁目(内湖、漁業、琵琶湖大橋)—おとせの浜—浮御堂—堅田駅前周辺(新興住宅、交通)—〈昼食〉—〈JR湖西線〉JR比叡山坂本駅—一日吉大社(重伝建地区、穴太衆積みの石垣)—JR比叡山坂本駅(現地解散)

費用：650円(内訳：浮御堂300円、日吉大社270円、湖族の郷資料館80円。最寄り駅までの往復の電車代と昼食代は各自負担。)

その他：雨天決行。昼食は、堅田駅周辺にて各自でお願いいたします。コースには若干の変更を加えるかもしれませんがご了承ください。

連絡先：参加ご希望の方は、10月22日(木)までに電話またはメールで佐藤ふみ(電話：080-6162-9008 E-mail：f.sugarin@gmail.com)までご連絡ください。

交通：JR東海道・湖西線 大阪9：15→堅田10：06 1,110円

2. 地理学研究会第96回例会(研究例会)

日時：2009年12月12日(土) 15時開始 18時懇親会開始

会場：関西大学第1学舎1号館A501教室

(懇親会は1階の不二家食堂にて開催予定)

講演：芦田淳一(関西大学・院)：近世寺院の屋根と景観

野田晋一(京都市森林組合)：日本の林業の現状と課題 —自身の経験を踏まえて—

高橋誠一(関西大学)：琉球と日本の歴史観と伝統的地理思想

*なお、例会の冒頭で本年度の奄美大島龍郷町における実習調査の報告を予定しています。

教室だより

■3月28日(土)に橋本征治教授の古稀祝賀の会が開催され、最終講義には本学の教職員や卒業生、現役学生・大学生が多数拝聴し祝賀パーティーには104名の参加がありました。このときの講義の講演録「太平洋の島々が語りかけること—1977～2000—」が『史泉』第110号、2009年9月刊に掲載されています。

■平成21年度の学部地理学・地域環境学教室の新入生は27名の多き数となりました。4月23日(木)夜に「フランススペース」で歓迎会を開催しました。地理学教室の3回生は17名(1名は編入)、4回生19名、大学院博士前期課程は4名のM1を迎え、M2・M3とあわせて11名となりました。博士後期課程はD1には学内から2名のみで、学外からの進学者はありませんでした。総勢15名となりました。また、9月入学者として、ベトナムからの留学生1名を文化交渉学専攻に迎えました。その結果、9月末現在の教室の人数は研究員まで含めて90名となりました。

■恒例の「地理学実習」によるバスによる1泊巡検は、当初5月30日(土)～31日(日)に、南山城・宇治・信楽方面を予定していましたが、新型インフルエンザの流行で5月下旬に大学が休校となり、この行事も急遽中止となりました。その代替として、日帰りではほぼ同じ内容で7月19日(日)にバス巡検しました。参加者は教員が高橋、野間、伊東の3名で、3回生、M1の全員をはじめ、2回生、M2、Dコースや卒業生の吉兼崇博さんも参加し、54名の盛況でした。コースは新大阪—名神高速道—新名神高速道路—信楽宮址—信楽陶芸の森—長野—宇治田原—宇治—サンガ城陽—木津川流れ橋—淀(一次解散)—JR大阪駅

■末尾至行本学名誉教授は2009年春の叙勲で瑞宝中綬章を受けられました。その業績は大別すれば、資源地理学に関する研究、西南アジアの地誌学的研究、フランス地理学研究の3領域です。それらの研究でいずれも優れた功績を残

されました。

■大学院合同演習は7月18日(土)、10時～17時に、地理学・地域環境学実習室で行われ、D3の堀内千加、松井幸一、芦田淳一、M2東出修一、叶農、松田玲、高島正樹、M3の松井僚平の8名が発表しました。また9月26日(土)合同演習には、研究生の石坂澄子、D2の上野裕、D1舟越寿尚、グルン・ロシャン(文化交渉学専修)、M1の向井浩之、斎藤鮎子、佐藤ふみ、熊鷹の7名が発表した。病気で2名が急遽欠席したのは残念でした。

■2008年度文学部の優秀卒業論文に斎藤鮎子さんが選ばれ、3月に表彰を受けました。8月にはそのエッセンスを地元で発表し、三つの地方新聞に掲載されました。

■今年度新たに非常勤講師としてご出講いただいた先生は以下の方々です、小松原尚(ツーリズム論)、小椋純一(地域環境システム論)、立見淳哉(地域学b)、堂野智史(地域マネジメント研究)、堀内明博(D歴史地誌学特殊研究A・B)、山野正彦(D社会地理学特殊研究A・B)、天野太郎(地図の知恵・地理の思想)、山近博義(M歴史地理学研究A)、中川聡史(M人文地理学特殊研究)、福田珠己(オープンリソース論)の6名です。学部の新カリキュラムが今年から本格稼働して、原則半期完結の授業となりました。また博士課程後期課程の半期集中講義として、上越教育大学から志村喬先生に8月下旬に地理教育について講義いただきました。

■木庭元晴教授は08年9月22日からニュージーランドを中心に、オーストラリアでの2008年度の秋学期在外研究を終え、2009年3月22日に帰国しました。

■2009年3月～9月までの教員の海外出張は以下の通りでした。木庭元晴：オーストラリア・ニュージーランド(08年9月22日～09年3月22日：関西大学の在外研究)、野間晴雄：ベトナム(4月17日～21日：グローバルCOEの周縁プロジェクトでのフェイールドワークの

山本浩良
まだ地理について全く知らないけれど、3年間かけて地理について知っていきたいと思います。よろしくお願いします。

項 磊
中国からの留学生です。かなり勉強になる専修です。楽しみながら身につける知識がいっぱいあります。現地調査で重要な経験を身につけたい。

竹下裕隆
福井高専、社会人、予備校を経て関西大学に編入で入りました。地理学専修を選んだ理由は、予備校のときに地理を勉強しまして大変おもしろかったということ、もともと様々な環境問題に興味があったからです。よろしくお願いします。

松尾智也
ただいま台湾で留学をしております松尾智也です。

新院生紹介

博士前期課程
佐藤ふみ
一途に地歴を愛してここまで来ました。マイペースに頑張ります。

熊 鷲
今年は梅花女子大学生活環境学部を卒業して、関西大学大学院自然地理学専修に入学しました。自然環境に関してことをやりたいので、木庭先生ゼミに入りました。まだ日本に来て2年間ですから、分からないことが沢山ありますので、これからの2年間もみんなと一緒に勉強しながら頑張りたいと思います。

松田邦廣
はじめまして、松田と申します。伊東ゼミに参加しております。外部から入学したため、関西大学のことにはまだまだ分かりませんが宜しくお願いします。

向井浩之
関西学院大学から来ました。まだまだ関大の事は分からないことだらけなので大変ですが、一生懸命頑張りたいと思います。

齋藤鮎子
春は別れと出会いの季節。3月に友が関大を去って行きました。私は関大に残り悲しく淋しいです。しかし、出会いを忘れていました。なので、みなさんよろしくをお願いします。

博士後期課程
舟越寿尚
修士課程に引き続き、博士課程でも関西大学でお世話になることになりました。今後とも精進していきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

Grung Roshan
私は世界の一番高い山エベレストの国ネパールから参りました留学生のグルン・ロシヤンと申します。私は東アジアと南アジアの文化交渉について非常に興味を持っており、現在、東アジア文化交渉学専攻で、野間先生の下でお茶の研究をしています。

Tran Thi Mai Hoa
私はベトナムのチャン・ティー・マイ・ホアと申します。関西大学の文化交渉学部の博士後期課程の一回生です。観光に興味があるので、現在は野間先生の下でベトナムと日本のエコツーリズムについて研究するつもりです。

下見・打ち合わせ)；アメリカ合衆国(5月8日～13日：グローバルCOEでのコロンビア大学国際シンポジウム参加、ラウンドテーブルでの発表)、韓国(8月17日～21日：FHG巡検参加)、ベトナム(8月30日～9月13日：グローバルCOEの周縁プロジェクトでのフェイールドワークとハノイ調査)、③伊東理：イギリス(8月18日～9月2日：日本学術振興会科学研究費による都市調査)

■教員免許更新講習に本教室も協力し、今年度は野間晴雄教授と森田勝非常勤講師がそれぞれ、地理歴史科フィールドワークとして、10月18日(日)、25日(日)に実施予定です。民主党政権になって、小中高等学校の教員免許更新の制度は1年目にして早くも先行きが不透明になってきましたが、地形図を見ながら現地を歩いて、地域への理解や生徒への実践的な指導法は普遍的な方法であることを主張していこうと思っています。

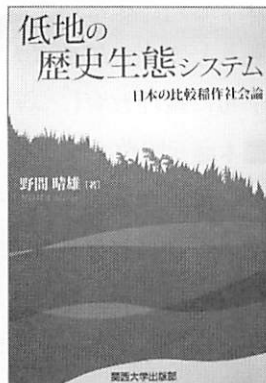
■3回生配当「地理学・地域環境学実習」と博士課程前期課程「地域調査研究法A・B」合同でのフィールドワークが鹿児島県奄美大島龍郷町で10月5日(月)～9日(木)の3泊4日で台風直撃の荒天のなか実施されました。担当は高橋誠一、野間晴雄教授。詳しい報告は次号。

■新刊書紹介

野間晴雄著『低地の歴史生態システム—日本の比較稲作社会論—』、関西大学出版会、2009年3月、全497頁、4200円

2006年の3月に関西大学から授与された学位論文『湿润アジア稲作社会の歴史生態研究—農業・技術・村・生活の変容をめぐる比較地誌—』のうち、日本の部分を取捨選択し理論・展覧的な第1編

に続いて、実証研究をまとめたもの。実証編は、氾濫原湿地として新潟平野、クリーク型低地の有明海沿岸低地、近江盆地の稲作社会の3編15章の歴史地誌的な論考である。アジア稲作



社会のなかでの日本の稲作社会を歴史生態システムとして、農村、技術、農民、自然環境をとらえようとした。



橋本征治 編著『“モダン”の諸相』、モダンの会、2009年9月、全220頁、非売品

今年定年退職された橋本征治先生(関西大学名誉教授)が主宰され、大学院博士後期課程の現役院生や元院生に、他のゼミ出身者も交えた勉強会的性格をもった自主ゼミの成果が自費出版された。内容は「近代」をキーワードにしたオリジナル論文による論集で、橋本先生の序章と終章がつく。編集は元・橋本ゼミの吉田雄介・水田憲志氏があたった。問い合わせは吉田雄介氏まで。目次は以下の通り。

- 序章 さまざまな“モダン”—時間と空間— 橋本征治
- 1 ベルク風土学における場所—近代的環境把握を越えて— 大槻恵美
 - 2 近代期における塵芥処理の組織化・大規模化—神戸市当局の動向を中心に—吉田雄介
 - 3 近代金沢における道幅と街路整備—都市内部構造との関わり— 岡本訓明
 - 4 捕鯨業の近代化と捕鯨根拠地の成立過程—熊野灘漁場を例として— 元田茂充
 - 5 首里城の文化財指定をめぐる経緯からみた近代沖縄 賀納章雄
 - 6 都市圏における生活用水・排水システムの近代化—昭和戦前期までの大阪都市圏を中心として— 矢嶋 巖
 - 7 日本の線路名称—空間構造との関わりについての—考察— 水谷彰伸
 - 8 「内地」と「外地」をめぐる人の移動と植民地近代—八重山から台湾へ、台湾から八重山へ— 水田憲志
 - 9 農村地域の変容とため池—京都府南丹市野本池水利組合の事例— 野田晋一
- 終章 <9+1>の“モダン” 橋本征治
あとがき 吉田雄介・水田憲志

『千里地理成長記2』の発刊

橋本征治先生の古稀記念・退職に際して、『千里地理成長記2』が3月28日に刊行されました。この前著にあたるのが『千里地理成長記：地理学教室30年史』（1998年3月刊）です。前著以降の教室の歴史と記録、卒業生と現職教員・大学院生が寄稿した橋本先生にちなんだ文集で、A5判108頁のハンディなものです。なつかしい写真や論文タイトル、千里地理通信の目次などが貴重な情報が満載されています。その目次は次の通りです。古稀記念パーティーに参加された方や主要地理学教室には配布しましたが、まだ若干の残部があります。ご希望の方は郵便振替用紙に住所・氏名、電話番号を記入して、実費2500円と送料80円の計2580円を事務局に振り込んでいただければ送付いたします。

第I部 橋本征治先生の足跡

履歴

著作目録

第II部 思い出集

木庭 元晴：橋本先生は南十字星

高橋 誠一：隣の温もり

伊東 理：橋本先生のご退職と私の近未来

野間 晴雄：下戸と癒し系

山元 憲司：橋本征治先生との出会い

大石 幸夫：橋本先生の想い出

平岡 昭利：橋本先生とコーヒープレーク

大西 清見：地理学教室開設期7年とその後

中村 雅俊：橋本先生のお父上との出会い

高田 研：それは野迫川村から始まりました

渡邊 登：地理と教育

三好 唯義：教室と橋本征治先生、そして私

福沢 清司：在学中の思い出の中から

柿原 昇：思い出と再会

前田 博之：橋本先生の思い出

中島 茂：現地調査—橋本先生との思い出

石川 雄一：橋本先生のながい思い出

遠川 明彦：橋本先生の記憶

梶野 耕司：地理学が仕事に結びつく

貝柄 徹：橋本先生との海外フィールド

夢田 祐子：きっかけは橋本先生なんです

森 眞一郎：あたたかさときびしさの記憶

赤岩 健治：地理学教室のカリキュラムの変化を見て

三木 理史：思い出三題

賀納 章雄：地理学教室とのご縁

小野田一幸：指導教官であった橋本先生

田島 薫：橋本先生と、バブル期の能天気学生たち

矢嶋 巖：一不良学生による述懐

松田順一郎：回想

水谷 彰伸：「元橋本ゼミ生」の一人として

矢嶋 英子：追体験

野田 晋一：「スイスの会」の頃

水田 憲志：台湾・蘭嶼調査

矢野 司郎：続・十年一昔？の続き

別所 秀高：農耕をめぐる内海の文化交渉

元田 茂光：「空白期間」を埋めるべく

伏見 能成：わが師、橋本先生

角 克明：時間旅行ができるならば・・・

吉田 雄介：申しわけありませんでした

古田 雅和：地理学教室で一番やさしい先生

岡本 訓明：「また思いつきか」

奥野 一生：博士論文の御指導をいただいて

堀内 千加：橋本先生との思い出

松井 幸一：橋本先生の思い出

白澤 武蔵：最後のD生かも

松原 光也：橋本先生との思い出

丸橋由起子：橋本先生最後のゼミ生

第III部 教室のあゆみ

地理学・地域環境学教室の歩み

—その後の十年を振り返って—

橋本征治

教室の年譜

教員一覧（1999年度～2008年度）

卒業・修士・博士論文題目一覧（1998～2009）

カリキュラムの変遷

地理学実習 年度別調査地域・報告書一覧

地理学・地域環境学実験室と資料室

地理学・地域環境学実習室

1999年～2008年度フォーカストピックス

巡検先一覧

『千里地理通信』目次一覧

※なお、当日配布した冊子には、柿原昇・元田茂光様の文章が脱落しており、たいへん失礼いたしました。深謝いたします。

随想

誰もが楽しくできる 地理教育を

桑原 康宏

生まれも育ちも生涯勤務も和歌山県内で終えようとしていたとき、野間晴雄教授から暖かいお誘いの声をかけていただいた。先生の大変なご尽力でたとえ週1日とはいえ初めて県外に仕事を持つことができたのは嬉しかった。

長い高校教員生活の中で感じていた地理嫌いの生徒を如何に少なくできるか、そのため地理教育の苦手な社会科学の教員をどうしたら減らすことができるかという長年の課題を、学生諸君と「地理歴史教科教育法」という科目のなかで学び合うチャンスを与えていただいたことは幸せであった。

高校の地理歴史科といえば、どの学校も一般的には地理科歴史科ともに同数かそれに近い教員配置になっていると思われがちであるが、実際には、歴史出身者が圧倒的に多い。どの教員もカリキュラムの編成上どの教科も担当せざるを得ないが、経験上歴史教員の多くは地理を教えることを喜ばない。それは、地理嫌いとは地理独特の用語と技能を修得していないというところからくるもので、とくに地形を地形図から考察するとか、気候区分、統計の処理などは速習では間に合わないからである。だから新学期早々教科書をペラペラめくるだけで拒否反応を示してしまう。それでも無理にでも担当してもらった場合もあるが、いやいや担当をしてもらった先生の授業評価は相対的に悪く、教科の面白さを伝えることができていない。つまり授業を受ける生徒も不幸で、生徒に対し失礼である。それがまた地理嫌いな生徒を増産する結果になってしまう。授業がうまくいかなかった先生には、次年度からはほとんど担当してもらえない。

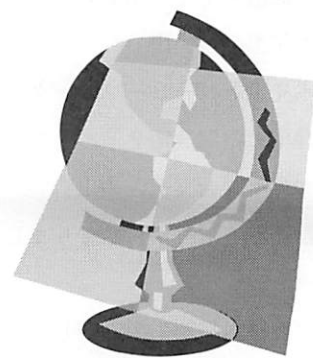
なぜ地理の授業担当が嫌われるのだろうか。その1つが「学習指導要領」が地理的技能や地理的なものの見方を強調していることであろう。これが地理教育を、地理学教室出身者の特権科目で、地理的技能などを修得していなければ神髄を教えることが出来ない「開かれていない教科」という印象を与えてしまうからではないかと

思う。少なくとも高校地理は、地理を履修をしていない他教科専攻生にはハードルの高い排他的閉鎖的な特異教科ではないはずである。地歴科の教員であれば、誰でも楽しく地理を教えることができるはずである。そのような指導要領と教科書を早急に作成していただきたいと思っている。

拙講の受講者の大半は高校で地理を履修していない人が多かったので、一人でも地理嫌いな人を無くすよう努力をした。受講者はみんな前向きに、まじめで真剣に取り組んでくれたので嬉しかった。高校で学んでいない地理的技能に不安がる人もいたが、わたしにはそれを能動的な悩みとみている。すぐに自身で修得しうるものと思っている。

拙講を通して、地理の食わず嫌いの学生がどれだけ減ったかはわからないが、少なくともわたしには手応えがあった。体調不良等によって本校を去ることは本当に寂しいが、一期一会であったにしても学生諸君と意見を交わせた喜びは大きく生涯忘れられない。嬉しかった。出講日を心待ちにする日々であった。4年間お世話になったが、最後まで野間先生をはじめ関大地理の先生方、事務職員の方々に本当によくしていただいた。感謝の念でいっぱいである。有り難うございました。今後も幸多き関大地理であることを祈念したい。

(関西大学文学部・非常勤講師)



千里地理通信 第61号

2009年9月30日 発行

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内

編集担当：野間晴雄 佐藤ふみ

TEL：06-6368-1121 (内線4890：大学院生室)

e-mail：moto@kansai-u.ac.jp

URL：http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/

~moto/KU_Geography/

郵便振替：大阪00970-4-81149